

論文内容要旨

論文題目

高校生を対象としたセクシュアルヘルスリテラシー育成プログラムの開発

教育・研究領域：生涯生活支援看護学

氏名：遠藤 美穂子

【内容要旨】

本研究は高校生を対象としたセクシュアルヘルスリテラシー（以下、SHLとする）育成プログラムの開発を目的とした。

ヘルスリテラシーをもとに作成した SHL 育成プログラムにて、X 県 Y 地区の高校 3 校に在籍する高校 2 年生 66 名を対象に介入を行った。高校生向け SHL 尺度得点、eHEALS 日本語版得点、性知識得点をアウトカムとし、事前、介入直後、介入 1 ヶ月後に自記式質問紙を用いて調査を行った。

結果、高校生向け SHL 尺度得点、eHEALS 日本語版得点、性知識得点は介入直後に上昇し、1 ヶ月後も持続していた。SHL 育成プログラムは高校生の SHL の向上、e ヘルスリテラシーの向上、性知識の向上に有用性がある可能性が示唆された。

令和3年12月23日

山形大学大学院医学系研究科長 殿

学位論文審査結果報告書

申請者氏名： 遠藤 美穂子

論文題名： 高校生を対象としたセクシュアルヘルスリテラシー育成プログラムの開発

審査委員：主審査委員 布施 淳子

副審査委員 藤田 愛

副審査委員 小林 淳子



審査終了日：令和3年12月23日

【 論 文 審 査 結 果 要 旨 】

諸外国では若者が劣悪な性情報に晒されていることが問題とされ、包括的性教育の中で性情報に関する教育内容が組み込まれている。一方、国内では必要な情報を収集し、適切な意思決定や行動選択を行う力を育むことが課題とされているが、性教育の指針となる学習指導要領には反映されておらず、育成プログラムが確立していない。高校生の多くは正課授業で性教育を受講する最後の機会となる。これらの対象には性知識を伝えるだけに止まらず、必要な時に自らが正しい知識を得て利用する力を養うことが必要である。この能力を高めるために研究者が着目したのはヘルスリテラシー概念を活用することである。本研究の目的はヘルスリテラシーの概念に着目し、高校生を対象としたセクシュアルヘルスリテラシー（SHL）育成プログラムを開発することである。

SHL 育成プログラムはヘルスリテラシー概念に基づいた内容を、事前課題、グループワーク・講話、事後資料で構成した。対象は X 県 Y 地区で学校管理者が本研究の実施を許可した高校 2 年生である。調査内容は担当教諭には性教育状況について教授している性教育の項目等を尋ねた。SHL 育成プログラム対象者には高校生向け SHL 尺度、eHEALS 日本語版、性知識について、自記式質問紙を用いて介入前、直後、1 か月後の 3 回調査を行った。分析は SHL 尺度得点（得点範囲 10-50）、eHEALS 日本語版得点（8-40）、性知識得点（0-20）について、記述統計量を算出後、3 回の変化を Friedman 検定、事後検定は Bonferroni 法により行った。

対象校は 3 校で各校 1 クラスとなり、3 回の調査に同意が得られ、かつデータに不備のない 66 名を分析対象とした。SHL 尺度得点は介入前中央値 30.0 点、直後 36.5 点、1 か月後 33.0 点であり、介入前から直後、介入前から 1 か月後の間に有意差が認められた。eHEALS 日本語版得点は 22.0 点、26.5 点、28.0 点であり、介入前から直後、介入前から 1 か月後の間に有意差が認められた。性知識得点は 9.0 点、13.0 点、11.0 点であり、介入前から直後、介入前から 1 か月後の間に有意差が認められた。高等学校 3 校の 2 年生に実施した結果、SHL、eヘルスリテラシー、性知識の向上が認められ、SHL 育成プログラムの有用性が示唆された。本研究は新知見が得られており、看護学の実践に貢献できるものである。また、本研究は審査基準を満たしており、学位論文（博士）として相応しいと評価した。